

URBAN PLAN PRESS

WORKS

Pierre Fabre Japon
ATJC
dSPACE Japan
メリノリア

A media magazine that
introduces the future of
offices and work styles.

We propose new ways
of working through
office design.

PICK UP OUR NEW OFFICE
URBAN PLAN OFFICE

UPP

Vol.
007





UPP

Pierre Fabre Japon

東京・赤坂のビルに本社を構えるピエール ファーブル ジャポン。コロナ禍を機にリモートワークを取り入れ、2022年12月には新しい働き方に対応したオフィスへとリニューアルさせた。

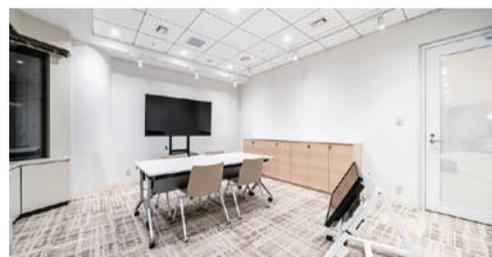
新オフィスのコンセプトは「行きたくなるオフィス」。自宅やカフェより会社の方が仕事が捗るような「機能性」と、化粧品品の輸入販売を展開する企業ならではの「清潔感」を大事にした。自然由来の化粧品を取り扱うことから全体的にナチュラル風のデザインでまとめ、ルーバーや一部の壁紙、ファニチャーを木目調にするなど、同社発祥の地である南フランス的な美的感覚も意識した。随所にグリーンを配したほか、ピンク・オレンジ・ホワイトのブランドカラーもポイントに入れ、企業イメージの定着・向上も図る。

約150坪のオフィスのうち、リニューアルしたのはエントランスとレセプション、会議室を除く約100坪の執務スペース。10人ほどが席につけるビッグテーブルを中心に、集中できるソロブースやファミレスタイプのボックス席、カフェのようなカウンター、打ち合わせなどに使えるハイテーブル、さらにリビングのようなソファなど、多様な席を用意。梱包・発送などの業務に使えるカウンターや、動画配信機材をそろえた配信ルームも設けた。約30人が所属しているが、固定席は社長室と副社長室のみで、他は全てフリーアドレスとしている。執務スペース内には社員数を上回る約50席ほどが並ぶが窮屈さはなく、むしろ余裕を感じさせる。もとのオフィスはグレーのスチールデスクが島ごとに並び、いかにも日本的なスタイル。だが、新型コロナウイルスの流行で社員の出勤頻度が減ったこともあり、社員の多くは特に改修

の必要を感じていなかったという。ところがそのコロナ禍中、経営陣からオフィスのあり方が問われたのをきっかけに、社員たちのあいだにも働く場を見直す機運が生まれていく。そして具体的なプロジェクトが進むなか、まず挙げたのは「収納エリアの大幅削減」に対する不安の声だったという。オフィスリノベーションプロジェクトを担当した田川氏は振り返る。「これまで手元に置いていた荷物がすべて置けなくなるのですから、不安な気持ちは十分に理解できました。ですが、収納エリアがあればあるほど、荷物が増えていくだけです。その代わりに契約倉庫の利便性を高め、中1日で荷物を引っ張ってこられるシステムを構築しました」。

今もリモートワークが適用され、社員に出勤の義務はない。そのなかでリニューアルするオフィスとして、機能にもこだわった。目指したのは、徹底した働きやすさ。例えば多くのオフィスが「PCひとつで仕事できる」と謳うが、実際は周辺機器を持ち込まなくてはならない。そこで新オフィスには、コード類、モバイル充電器やマウス、モニターも用意し、文字通り「PCひとつで仕事できる」環境を整備した。今では自宅やサードプレイスより会社の方が仕事が捗るという声が多く、田川氏も「私自身、カフェで仕事しなくなりました」と笑う。

新しいアイデアも生まれている。新しく設置された配信ルームでは、これまで無機質な会議室から配信していた化粧品販売員向けのレクチャーはもちろんのこと、一般消費者向けのインスタライブ実施などの構想も挙げられている。出勤する社員が少しずつ増えてきたのは、新型コロナウイルスの流行が落ち着いたせいだけではなさそうだ。



EAU THERMALE
Avène
LABORATOIRE DERMATOLOGIQUE



「アベニス」シリーズ

インタビュー：
コミュニケーション部 マネージャー／田川 百合子 様

PROJECT

オフィスリニューアル

株式会社ピエール ファーブル ジャポン
東京都港区赤坂2-17-7 赤坂溜池タワー2F
<https://www.avenne.co.jp/>



UPP

ATJC Tokyo

AIの活用に関するアドバイザーとシステム開発を主要とするATJC。その業務クオリティーは、所属するITエンジニアの質にかかっているといっている。人材の確保・育成という課題が企業活動のなかで比重を増すなか、ATJCが出した答えは「オフィスの充実」。拡大移転を機に、働く人のための取り組みを進めている。

東京・市ヶ谷の新オフィスは、靖国通り沿いのビルの5階と7階、合計約430㎡を占める。5階に会議室と研修施設、7階に執務室とミーティングルームを設け、2022年6月にオープンを迎えた。

新オフィスのコンセプトは、「ターミナル」とした。従業員のほとんどがエンジニアで、クライアントへの出向や派遣が多い同社。出社する人数は限られ、従業員同士が顔を合わせる機会も少ない。そんな同社の新オフィスの構築は、企業活動の根幹でもある人と人とのつながりを保つことに目標が置かれた。同社取締役の山田康之氏は「ここから出かけ、また帰ってくる。そこで、人と人が交じり合う。そんな、空港のターミナルみたいな場所にしたい」と話す。

内装意匠もターミナルがテーマ。5階に5室ある会議室は、「ヒースロー」や「ジョン・F. ケネディ」など空港の名前が付けられている。扉には室名が書かれたサインを表示し、ファニチャーやカーペットも部屋ごとに変え、それぞれの都市をイメージした。さらに、5階の約半分を占める研修施設は、その名も「ターミナル」とした。常時30人ほどが研修を受けるスペースで、カフェか空港のラウンジのような暖かみのある雰囲気。最大70人が着席して研修を受けられるスペースを確保しているが、デスクとチェアを並べる単純なスクール形式にせ

ず、壁際に階段状のひな壇を設けるなど、単調さを省く配慮も施している。

7階は、会議室が2室と執務スペース。こちらは研修スペースとは趣を変え、清潔さを感じさせる意匠としている。現在は20席ほどを用意しているが、将来的な増員も考慮し、最大で50人ほどが執務できるようかなり余裕のある配置となっている。

同社では現在、年間300人ほどが入社し、研修を受ける。ところが、大手町にあった移転前のオフィスは40坪ほど。立地は申し分なかったが執務スペースだけでいっばいで、年々増える従業員の研修や打ち合わせまでには対応できず、打ち合わせは近くの喫茶店で、研修は近くのビルに借りた一室で行っていた。非効率だけでなく、従業員の一体感の醸成や連携にも支障をきたしていたという。

「従業員が増えて手狭になったのはもちろんですが、移転を機に、会社という場所を従業員にも楽しんでもらえる場にしたい」と話すのは、同社代表取締役の齋藤拓氏。「『ターミナル』が出発点であるように、オフィスも、会社にとって、従業員にとっての出発点だと思うんです」

新たな出発点を得たATJCでは、従業員同士の絆を深めるためのイベントも始められている。年始に、お花見、内定式。なかでもお花見は、眼下に並ぶ靖国通りの桜並木を眺めながらゆっくりお酒を楽しむ人気の行事だという。

派遣先に出向く人がいて、一人前になって巣立っていく人がいて、そしてまた帰ってくる人がいる。ここはそんな、人が翼を広げるターミナルだ。



左: 代表取締役 / 齋藤 拓 様
右: 取締役 / 山田 康之 様

PROJECT

移転

株式会社ATJC

東京都千代田区九段北4-1-9 市ヶ谷MSビル7F

<https://atjc-it.jp/>

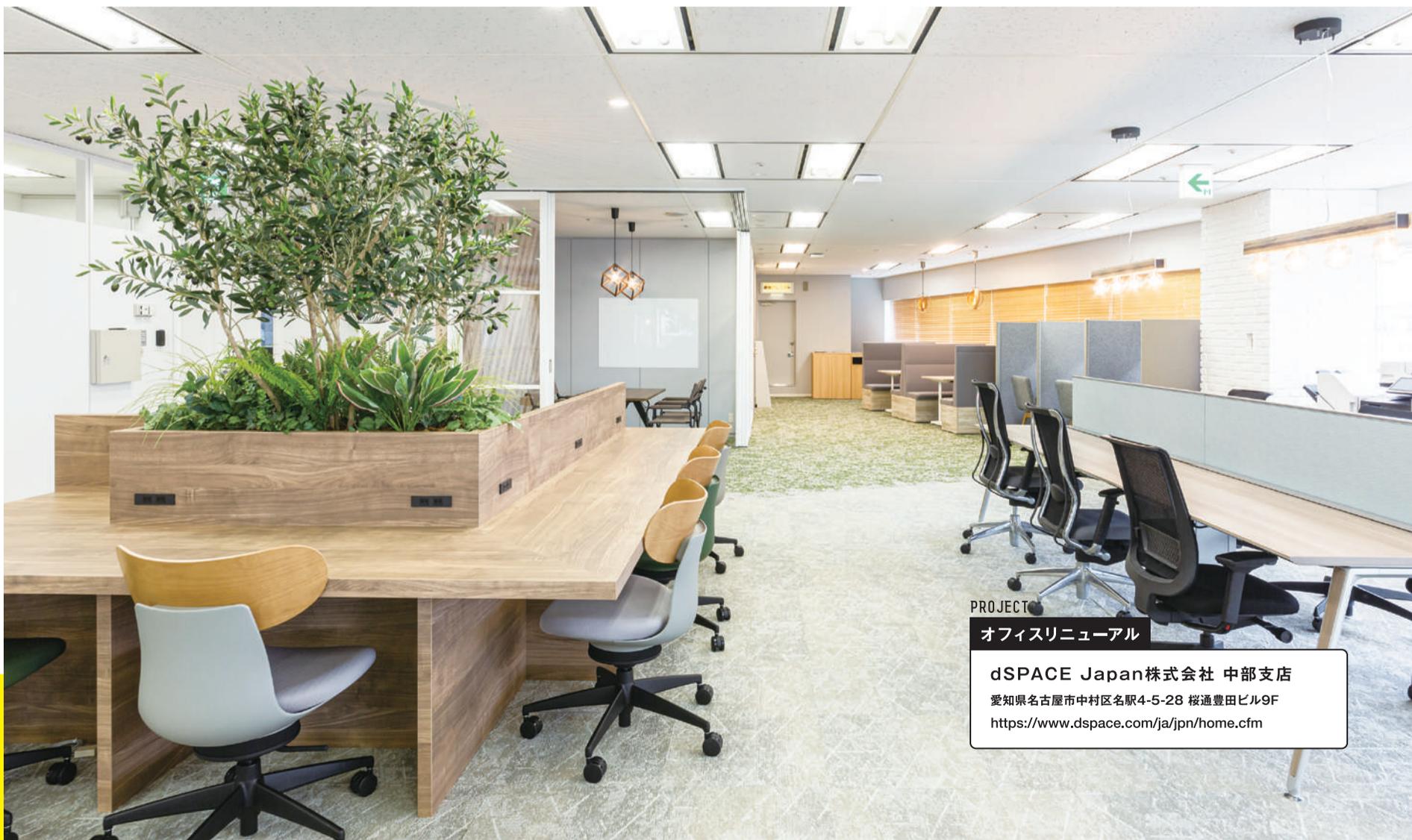
dSPACE Japan

dSPACEの主業は、電気自動車の効率性や自動運転システムのシミュレーション・検証など。これからのモビリティに欠かせない業務であり、市場拡大が見込まれる分野だ。ドイツに本拠地を置き、日本法人には現在180名ほどが所属。そのうち40名ほどが働く中部支店では、2022年8月にオフィスリニューアルを実施した。その目的は、効率性向上だけではない。名古屋駅から徒歩5分ほど。交通利便性に恵まれたビルの9階に拠点をおくdSPACE Japan中部支店。新オフィスの内装は、暖色系の色合いでまとめられた温かみのある雰囲気だ。後方部門の6席のみが固定席で、他はすべてフリーアドレス。PC用モニターを2つ置いても十分な広さを確保できるデュアルモニター席や、ファミレスのようなボックス席、打ち合わせもできるカフェスペース、仕事に集中できる完全個室型のブースなど、多様なワークスペースを用意している。なかでも従業員に人気なのが、「アウトドア仕様」の一角。ミーティングや休憩などにも使用できる多目的スペースだが、そこに置かれているのはキャンプ用のテーブルやイス。緑のカーペットにナチュラルカラーのクロスと相まって、気分はキャンプ場だ。アウトドア好きの従業員が多かったこともあって設けたものだが、息抜きや気分転換にもなると好評を博している。コロナ禍以降、在宅勤務がすすみ、出社は月に5日。それを加味しても、レイアウトは余裕を感じさせる。この余裕も、今回のリニューアルのポイントだ。リニューアル以前からフリーアドレスを採用していたが、レイアウトは一般的なデスクをいくつかの島にまとめたもの。空間効率も良くなく、作業効率からも最良のワーク

スペースとはいえなかった。改善の必要性が認識されはじめたのと機を同じくして、同社ではモビリティ市場の拡大を見据えた新たな売上目標が立てられていた。これを達成するためには、作業効率や生産性、人員増に対応できるオフィスが必要との結論に達し、リニューアルプロジェクトがスタートしたのである。余裕あるレイアウトは、将来の増員に備えたもの。この「余裕」をねん出するため、リニューアルと並行してペーパーレス化を推進。キャビネットを削減し、デスクに置かれたままになっていた従業員の荷物も処分を促した。「いやがる従業員もいまして」と当初の苦勞を語るのは、オフィスリニューアルを推進した同社営業部の工藤裕子氏。同じく町田佳奈子氏も「でも、おかげで『アウトドアスペース』が実現できました」と話す。将来的なレイアウト変更にも備え壁の一部を可動式にしたほか、ウェブでのプレゼンなどに適した配信ブースや社内情報共有のための大型掲示板の設置など、新しい試みも盛り込むことができた。フルリノベーションと聞いていい大規模リニューアルだが、工期はお盆休みのわずか10日間。入念な準備とスケジュール調整の賜物だろう。以前から開かれていた月1回の社内ミーティングや交流会なども、より目的に即したものになった。有志が中心となって「整理、整頓、清掃、清潔、しつけ」の5Sを進める取り組みもはじまり、オフィス内の清掃はすべて従業員が自主的に行っている。オフィスが変化したことで、その使い方も変化しつつある。売上達成へ向けた攻めのリニューアルの効果は、それ以外の部分でもあらわれているようだ。



左: 営業部 / 工藤 裕子 様
右: 営業部 / 町田 佳奈子 様



PROJECT
オフィスリニューアル

dSPACE Japan株式会社 中部支店
愛知県名古屋市中村区名駅4-5-28 桜通豊田ビル9F
<https://www.dspace.com/ja/jpn/home.cfm>



UPP

メリノリア *Osaka*

時間や仕事の内容、その時の気分などによって働く場を変える。そんな働き方が定着すると、こんどは働く場の選び方が重視されるようになってきた。そして働く場を構築し提供する役割もまた、いっそう重要性を増している。新大阪エリアで複数のビルを所有する株式会社 Merinoria(メリノリア)。オフィスの賃貸と貸し会議室の運営を通じて働く場を提供してきた同社が、新たな取り組みを開始したのは2022年8月。「WORKPHIL(ワークフィル)」と名付けたシェアオフィスオープンさせ、働く場の選択肢を広げてみせた。「WORKPHIL」がオープンしたのは2022年竣工の複合ビル「KITENA新大阪」。同社が運営するビルの1棟で、建物は地上9階建て。1階がエントランスホールと本社オフィス、2~6階を貸し会議室とし、7階に「WORKPHIL」、8~9階にオフィステナントが入る。ワンフロア約100坪を占める「WORKPHIL」は、執務エリアとラウンジエリアからなる。執務エリアには3~6人用のレンタルオフィス12室と個人用のソロブース7室を用意。ラウンジエリアはカフェのようなラウンジを中心に、ミーティングルームやTELブース、キッチンなどが並ぶ。エントランスを入ってすぐのラウンジは、明るく開放的。大きな窓からは新大阪駅を見下ろすことができ、立地の優位性を実感できる。ナチュラルな色合いでまとめられた内装は、カフェのような暖かみのある設え。ソファやローテーブル、ボックス席やハイチェアなど多彩な「場」をそろえ、PCを持ち込んで仕事に打ち込んだり、来客との打ち合わせをしたり、あるいはゆったり過ごすこともできる。ファニチャーの配置や室内造作は曲線を基調としており、そ

れぞれの「場」がゆるやかにつながる。照明の色合い・配置とも相まって、くつろぎの空間を演出している。一方の執務エリアは、落ち着いた寒色系の色合いのなかにレンタルオフィスの扉が整然と並ぶ。ラウンジエリアのゆるやかさとは対照的に、集中を促されるような張り詰めた雰囲気が漂う。各オフィス内にはデスクとオフィスチェア、チェストが標準装備され、共用の複合コピー機も完備。PCひとつですぐに業務が開始できる。「ラウンジはゆったりと過ごせ、いろいろな使い方ができる空間。一方の執務エリアは、落ち着いて仕事に取り組める空間を目指しました」と話すのは、Merinoria取締役の黄友真平氏。開設にあたっては他社のシェアオフィスを10カ所以上視察し、レイアウトから内装部材、ファニチャー、照明まですべてにこだわった。だが、そのこだわりは決して運営者の独善ではない。「利用者の快適のために」をすべての判断基準とし、吟味した結果だ。オフィス賃貸と貸し会議室は20年以上の運営実績があるが、シェアオフィスの運営は初。代表取締役の黄友日登美氏は「お客様への新たなサービスの提供であるとともに、将来的な世代交代も視野に入れて」と、新たな事業にチャレンジした理由を語る。「これまで関わりのできた方々と、これから関わりのできる方々。それに地域の方々も一緒になって何かを生み出せるような、そんな拠点にしたいんです」(真平氏)「WORKPHIL」の「PHIL(フィル)」は、「フィルハーモニー」から名付けた。オーケストラのように、ここで交わる人々が共創できる空間にしたいという思いは、すでに前奏を奏で始めている。



左: 取締役 / 黄友 真平 様
右: 代表取締役 / 黄友 日登美 様

PROJECT
開所

株式会社Merinoria
大阪府大阪市東淀川区東中島1-18-5
<https://merinoria.co.jp/>
[WORKPHIL]
<https://workphil.com/>

OUR NEW OFFICE

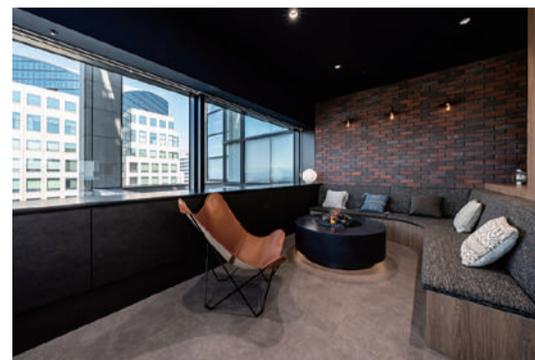
Yokohama OFFICE



執務空間にはスタンダードなデスク、昇降デスク、ビッグテーブルを採用し、タスクチェアは色味を統一しつつ全て違うチェアに。仕事内容や気分に合わせて好きなものをいつでも選べます。なにより広々とした素晴らしい景色を一望できるこの環境は、私たちのエネルギーを十分に引き出してくれます。



お客様をお迎えるカンファレンスルームには、着席時にも外の景色をお楽しみいただけるよう窓面に開けた造りとなっています。限りなく粹縁を感じさせないシャープなデザインのガラスパーティションを採用して多くの自然光を取り込み、室内をより明るい印象にしました。デスクの脚など、部分的にアクセントカラーを取り入れ、メリハリのあるカラーリングとしたのもポイントです。



膝をつきあわせてのチームミーティング、休憩したりお弁当を食べたりと、みんなの憩いの場となる土間エリア。執務室とはガラッと雰囲気を変えて、赤レンガと温かみのある照明の焚き火を囲んで円滑なコミュニケーションを図ることができます。

Vietnam DESIGN ROOM



オフィス内ではスタッフがお互いにアイデアを共有しやすいように、どのフロアにもコネクティングスペースを設けています。自席にいながら、すぐに勉強会やブレインストーミングを行うことができるレイアウトです。ワークスペースのデザインは、スタッフが集中しやすいようシンプルに仕上げています。



コーポレートカラーを散りばめたデザインは、さまざまな人やアイデアが集まり行き交う「アーバンプランらしさ」を表現しています。動線を意識しながらも、空間をフレキシブルに使えるレイアウトを意識しています。



可動式のパーティションは、普段は会議室を個室化し、スタッフのミーティングやイベントの際には部屋を繋げるなど、スペースの有効活用に最適です。ガラスのパーティションを採用し、解放感のあるオフィスをデザインしています。

URBAN PLAN OFFICE



東京本社

東京都新宿区西新宿1-26-2
新宿野村ビル32F

TEL 03-5909-0515

FAX 03-5909-0516



大阪営業所

大阪府大阪市北区芝田1-1-4
阪急ターミナルビル9F

TEL 06-6373-2340

FAX 06-6373-2341



名古屋営業所

愛知県名古屋市中村区名駅4-5-28
桜通豊田ビル5F

TEL 052-589-9981

FAX 052-589-9982



横浜営業所

神奈川県横浜市中区桜木町1-1-8
日石横浜ビル29階

TEL 045-226-3566

FAX 045-226-3567



ベトナム

62 Nguyen Chi Thanh Street,
Haichau 1, Haichau District,
Danang City, Viet Nam

UPP URBAN PLAN PRESS

Vol. 007

A media magazine that introduces
the future of offices and work styles.

We propose new ways of
working through office design.

<https://urban-plan.com/>

【発行】一級建築士事務所株式会社アーバンプラン Urban Plan Inc.

